

自立活動における集団・個別の授業形態についての考察

—知的障害特別支援学校中学部の自立活動の教育実践を通して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 中島涼子

1. はじめに

令和4年4月に出された「特別支援級及び通級による指導の適切な運用について」の通知（文部科学省,文科初第375号）において,特別の教育課程を編成する場合の自立活動の取扱いについて示された。それは,自立活動を特別支援教育だけでなく,通常の学級への共通の教育への改革的な通知であった。特別支援教育では,「自立活動」の指導を従来から行っているため,特別支援教育に関わる教員にとっては,自立活動は日常の教育課程である。しかし,実際のところ中学校で教科教育を行っている教員は,ほとんど「自立活動」を知らないのが現状である。

「自立活動」は原則個別指導で行われることが,学習指導要領に明記されている。一方で,特別支援教育の現場では,独自の授業形態が組まれている現実があることが,多くの研究で指摘されている。私自身も集団の中で個別のような授業形態で授業を行ってきた。そこで,自立活動の授業形態を通して指導について整理し考察する。

本稿では,まず「自立活動について」において,変遷と実際の指導についての概観を確認し,「知的障害の教育課程」において,その特徴と教育課程の内容について叙述していく。そこから抽出された実習の「授業観察報告」で,現場の授業についての観察内容について述べる。観察を通して,自立活動の「個別・集団授業」について着目し,授業構成について整理する。原則個別指導という考えを起点とした自立活動において,集団における授業形態の個別指導の「機能」に焦点をあて,「機能」の観点から整理し,その特徴を明らかにしていきたい。

1-1 自立活動について

自立活動は特別支援学校の教育課程に特別に設けられた指導領域である。まず,自立活動の大枠の変遷を概観し,指導の企図について具体的に叙述する。

a. 自立活動の変遷

自立活動は,盲学校,聾学校における「養護・訓練」が始まりである。身体的障害の機能の向上のための指導,訓練的な活動で,就業を視野に入れた指導であった。その後,肢体不自由教育では,「保健体育・機能訓練」として,病弱教育では「養護・保健体育」として,『教科』の位置づけで指導された。知的障害教育において自立活動が行われるようになったのは,「養護・訓練」が『教科』から,『特別の領域』として新設されてからである。

その背景には,知的障害教育は特殊学級から始まったこともあり,知的障害の特性から「6領域案（生活,生産,健康,情操,言語,数量）」（文部省,1983）がまとめられたことが挙げられる。そして,それは現在の合科授業に繋がってくる。教科での単独の扱いよりも,領域として幅広く指導する方が効果的であることが前提となっている。

b. 自立活動の個別の指導計画

「個々の児童又は生徒が自立を目指し,障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識,技能,態度及び習慣を養い,もって心身の調和的発達を培う。」

上記のように,特別支援学校学習指導要領,学習指導要領解説自立活動編（平成29年）の目標には明記されている。自立活動は,特別支援学校の教育課程に特別に設けられた指導領域であり,対象は,特別支援学校に在籍する児

童生徒、特別支援級に在籍する児童生徒、通級による指導を受けている児童生徒である。個々に応じた指導計画を作成するため、年度当初に「個別の指導計画」「個別の支援計画」を作成する。「個別の指導計画」は、学習指導要領の『個別の指導計画の作成と内容の取扱い』に従い、個々の実態に応じて指導目標を設定し、『自立活動の内容 6 区分 27 項目』から内容を抽出して作成する。今回の平成 29 年度の学習指導要領の改訂では、「個別の支援計画」の中に、自立活動の成果が進学先や就学先でも生かすことができるように関係機関と連携を図ることが追記された。それは把握した特性を長的に且つ、積極的に対応していくことが意図されている。それも踏まえて、「個別の指導計画」では、長期目標と短期目標を明確にして作成されなければならない。下記の図 1 は、上記についてまとめたものである。

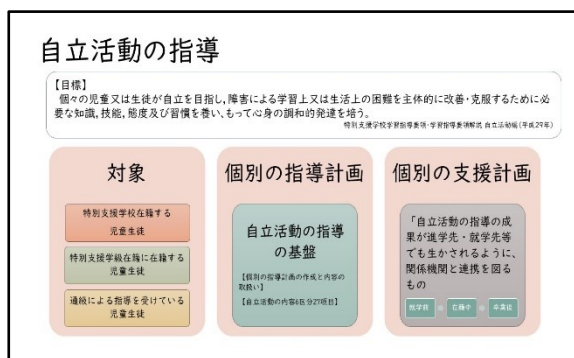


図 1 自立活動の指導について

c. 自立活動の指導

特別支援の学習指導要領では、「個別」という言葉が多く使われ、それは原理として伴っていることを意図的に示している。「個々に応じた『個別』の指導計画の作成」「自立活動の指導は、『個別指導』の形態で行う」「指導の目標を達成する上で効果的である場合には、集団を構成して指導することもある」「自立活動の指導計画は『個別』に作成されることが基本であり、最初から集団で指導することを前提とするものではない」

以上のことから原則個別指導であることを

明確に示し、個別で対応していくことを明確化しているのである。それは、授業を集団で行うことが望ましくないように示唆しているように見える。しかし、集団での指導が行われているのもまた現実である。

集団授業という授業形態の概念は、一見、一斉授業をイメージし、個別の対応のイメージは薄い。なぜそのような概念が伴われているのかにも着目し、集団の概念を抽出しながら整理していく。

1-2 知的障害の特別支援教育について

a. 知的障害とは

知的障害とは、「中枢神経に何らかの障害があり、発達の遅れや揺らぎによって社会的、日常生活上で支障があること」と文部科学省『障害に配慮した教育（3）知的障害』で提起されている。そして、障害の程度については、学校教育法施行令第2条の3で「知的発達の遅滞があり、他人との意思疎通が困難で日常生活を営むのに頻繁に援助を必要とする程度のもの」と示されてる。

以上のことから、知的障害の特徴として、障害の程度が見た目にわかりにくいことがあげられる。直接的に障害にアプローチをする指導ができないことから、時間割に設定した「時間における指導」では取り扱いにくいことが多くの研究で指摘され、「学校の教育活動全体における指導」の扱いで、常に指導することが望ましいと考える教員は多い。しかし、学習指導要領では、「時間における指導」を設定し、個別指導することを自立活動の原理として明記している。

b. 知的障害の教育課程

知的障害の教育の教育課程について見ていく。知的障害の教育課程は他の障害種とは異なり、学習指導要領では別段で示されることが多く他の障害種とは区別されている。

知的障害の教育課程の指導内容は、「各教科」「道徳科（特別の教科）」「総合的な学習の時間」「特別活動」に加え「自立活動」で形成され、ここは他の障害種と同様である。しかし、指導の形態をみると、知的障害教育の特徴がみら

れる。それは「各教科を合わせた指導」の存在である。「生活単元学習」「日常生活の指導」「作業学習」に関しては、教科・領域を指導する際に自立活動を含んで幅広く行う指導である。領域や教科を合わせて指導を行うことは、学校教育法施行規則第130条の第2項で明確に保証されている。つまりそれは障害の程度が、多様であることを踏まえて、知的障害教育上に規定されているのである。よって、自立活動は全ての授業の根底にあり、その上に教科等の授業が成り立っているのである。

c. 自立活動について

自立活動は特別の領域であり、特別活動や総合的な学習の時間と同じ位置づけをされている。その特徴は、時間割に設定されつつも、先に述べた通り、全ての指導においての土台となっており、幅広く指導が行われるところにある。

「時間における指導」と「学校の教育全体における指導」に二翼に分類することができる。前者は個別目標に特化して授業を計画して行うものであるのに対し、後者は学校生活の日常の中に組み入れて指導を行うものである。下記の『図2. 特別の領域としての自立活動』は、時間割に設定している「時間における指導」と「学校の教育活動全体における指導」を図式で表したものである。「時間における指導」は縦軸で表しているのに対して、「学校の教育活動全体における指導」を横軸で示した。先にも述べた通り、それは、全ての授業において根底となっていることを意味し、特別の領域であることを示すものである。

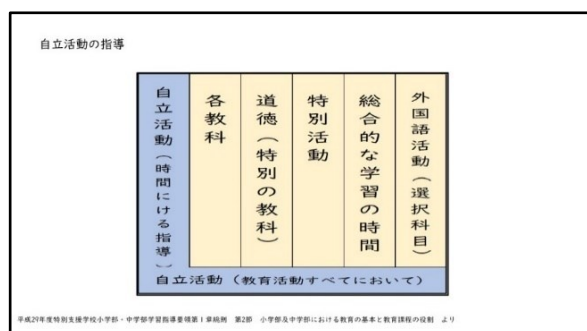


図2 特別の領域としての自立活動

知的障害教育では、「時間における指導」より「学校の教育活動全体における指導」で都度指導をする方が効果的であるという指摘が数多くある。しかしながら、従来から「時間における指導」を行っている学校もあり、時間割で設定されている指導が効果的であると認識している教員もいるのもまた現状である。

2. 研究

2-1 研究目的

本研究では、知的障害特別支援学校で行われている自立活動の授業形態について観察し、授業の構成を考察する。実際に行われている授業形態の構成を「集団・個別」で整理し、その上で、集団で行われている授業の「機能」について整理し、その特徴について明らかにすることを目的とする。

2-2. 研究内容

自立活動は「時間における指導」「学校の教育活動全体における指導」に分類することができる。本研究では、「学校の教育活動全体を通して行う」という領域の指導の特徴を踏まえ、「教科等における指導」を加え、3つに分けて参与観察を行った。それぞれの集団授業の意図を明確にするため、下記の3点について注目し、考察した。

a. 集団授業の構成が「集団を形成して行う授業」であるのか、又は「集団を構成して行う授業」であるのか。

上記の授業内容を加味しながら整理する。その授業がどのような意図で”集団にしているか”について考察することで、集団の性格を把握することができる。

b. 上記をもとに、集団の授業形態についての「機能」に着目して整理し、特徴について考察する。

ここで示す「機能」とは、自立活動の「個別目標」「内容（6区分27項目）」を前提としたものである。「機能」について着目することで、集団で行われている授業の本質が頻出するのではないかとこのところも吟味する。

c.「機能」について分類し、その特徴について考察する。

「集団を構成して行われている授業」は、目的の達成のための集団の構成であることから、実は個別指導を意図しているという概念に結び付いているといえるのではないかという点にも着目する。

2-3. 研究方法

本研究では実習校である知的障害特別支援学校中学部3年生の授業を観察対象とした。観察対象となる学年は、実習校の実態を概観した上で、障害の程度の幅が広く、集団意識を醸成する指導が行われていた学年を選定した。観察授業は、「自立活動の時間における指導」「学校の教育活動全体における自立活動の指導」「各教科等を(合わせた)における)自立活動の指導(国語・数学・生活単元学習・総合的な学習の時間)とし、授業実践の観察を行った。参与観察前に、個別の指導計画を見せてもらい、生徒それぞれの個人目標を確認して実施した。

3. 授業観察報告

本研究では知的障害特別支援学校で実習させていただいた。従来より時間割に設定した「時間における指導」を行ってきた特別支援学校である。

本実習では自立活動の指導を「時間における指導」「学校の教育活動全体における指導」に加えて、「教科等における指導」に分けて観察した。それぞれの事例を提示して叙述していく。

3-1「学校の教育活動全体における指導」

例1)「休み時間に友人にちょっかいを出されて、我慢の限界を超えて、怒りが頂点になり、どうにもならない。次の授業どころではない。」という生徒がいた。

教員はその生徒に対して、教科授業から自立活動へ一時的に切り替え、指導を行った。その指導内容は、セルフコントロールをする方法で、情動を安定させる指導であった。自立活動の内容としては、心理的安定、人間関係の形成、コミュニケーションが中心の内容区分にあたる。

情動をセルフコントロールするには、教員が生徒の情動について受容しながら、繰り返し指導をすることで集積されていくと考えられる。

例2)「昼夜逆転した生活を送っており、授業中に起きてられない」という、1日中睡魔に襲われている生徒の実態である。

教員は把握している生徒の実態から、次の2点を抽出し指導に組み入れた。1,ゲームが好きであること、2,明確に課題を示されれば、頑張れることの2点である。そこを加味して「本人が睡魔と戦っている」という設定のゲームを提示した。生徒の適性から楽しみながら学ぶ指導は、生徒は対戦表に意欲的に書き込みながら、活動することができた。これは自立活動の内容の健康の保持の内容区分にあたる指導である。生活リズムの指導が習慣になるまでには時間がかかる。積み重ねの指導が将来の就労に向けて重要となる。

学校の教育活動全体における指導については、その場で個別に指導することが特徴で、臨機応変に対応することが求められる。よって、授業形態としては、個別指導である。

3-2「自立活動の時間における指導」

実習校の時間割上に設定されている『自立活動』では、「身体グループ」「手指巧緻グループ」「コミュニケーショングループ」の小集団で活動が行われていた。それは、「個別目標」や「類似目標」の内容区分が同じ人を集めて構成している集団授業である。具体的な授業内容を見ていく。

「身体グループ」では、『パラバルーン』や『入れ物を使って物を運ぶゲーム』など、教員独自に作成したゲーム等をしていた。多様な動きや物を使用して活動する中で、他者を意識した活動内容が中心となっていた。その他にも肥満予防・改善を目標にしている生徒など、「健康保持」「人間関係の形成」「環境の把握」の内容を中心に行っている生徒を構成した集団の授業であった。

「手指巧緻グループ」は、日常生活で使用するハサミ等の道具を使う「身体の動き」の内容の授業だった。具体的には、毛糸でポンポン、

ペーパークラフトの制作を教員が支援しながら、活動を行っていた。このグループは集団の中で個別課題をする授業形態であり、一斉授業に類似している。

「コミュニケーショングループ」は、他者との関わり方を中心に、他者の感情の理解、言葉で相手に伝える等の他者と一緒に活動することで効果的な指導を行うことができる集団の授業であった。具体的な活動内容は、他者と一緒に活動する『共同ゲーム（二人一組で物を浮かせる）』など、教員が授業に適したゲームを独自に作成して行っていた。要素が強い活動であった。このグループは、身体グループと同様に「個別目標」の生徒を集団として構成して行われている授業形態であった。全てのグループで共通的に指導されていたことは、準備や片付け自体も活動のひとつとして捉えていることである。

上記の内容について図3で整理し、簡略に示してみる。左側の『個別目標同一課題』は「身体グループ」「コミュニケーショングループ」、右側の『個別目標個別課題』は「手指巧緻グループ」である。

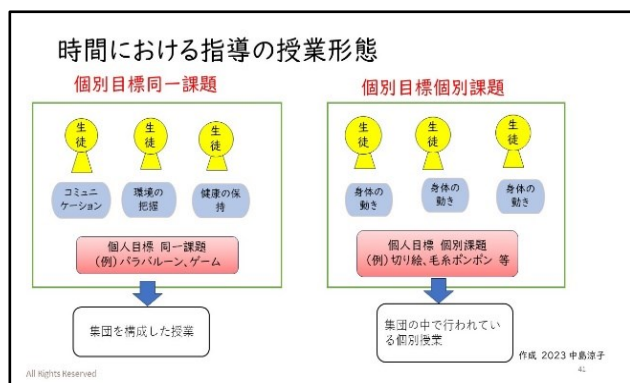


図3 時間における指導の授業形態

『個別目標同一課題』は、個々の目標となる目的は異なるが、偶々同一の課題をすることが効果的であるグループ。一方、『個別目標個別課題』は集団の中で活動しているが、個別の目標も課題も各々のことをしているグループである。

3-3 「各教科における指導」

各教科における指導では「国語・数学」「生活単元学習」「総合的な学習の時間」の授業の中で加味している自立活動に焦点を当てて観察した。

「国語・数学」の授業は、小集団に分かれて個別に課題別学習が行われていた。その中で、集団の中で「順番を守る」「他者を意識する」「学習時の姿勢保持」など、それぞれの自立活動の個別目標が設定され、教科の授業が編成されていた。例えば、国語では、言語の習得に合わせて、自立活動の言語の表出と合わせて指導を行うことで、効果的な活動となっている。

「生活単元学習」と「総合的な学習の時間」は、学年全体の同一単元で、各クラス等で一斉授業が行われていた。他者と関わりを持つ自立活動が根底に展開されていた。

「生活単元学習」では、修学旅行に向けた取り組みの授業であった。「清潔」や「マナー」についての学習、「行先の事前学習」を中心に、生活における自立活動の内容と合わせた授業が効果的に行われていた。例えば、衣服の調整、自分身体を理解、身辺整理等、個人の能力や目標に応じた課題が設定されており、個別指導が行われていた。「行先の事前学習」では理科や社会を合わせた合科授業が展開されており、個々に調べ学習が行われ、能力に応じたまとめ方で、内容を発表するなど、特別活動と連動させた学習をすることで、教科の横断的な取り組みも行われていた。

「総合的な学習の時間」では、修学旅行の流れをテレビのニュース番組のような構成の劇で表現し、それを文化祭で発表する取り組みが行われた。具体的には、いくつかの場面で構成され、学年全体で取り組む活動であった。個々の能力に応じた役割を、各場面でグループとして構成し、集団での活動が展開されていた。多くの生徒にとって、場面や状況を把握すること、的確に判断して行動すること、集団行動を通して状況に応じた行動ができるようになる等の自立活動の内容が中心となっていたように見て取れた。

4. 考察

本研究では、まず集団の授業形態の構成について「集団を形成して行う授業」、「集団を構成して行う授業」について整理した。一つの単元を同一課題で行う授業形態について「集団を形成して行う授業」とし、目標や内容ごとに集団を構成している授業形態を「集団を構成して行う授業」とした。実習校の知的障害特別支援学校の時間における指導は「集団を構成して行う授業」で実施されていたことを受け、ここからは「集団を構成して行う授業」に着目する。

ここまでの実習の観察を通して、先にも述べたように「時間における指導」では、「集団を構成して行う授業」という概念のもとに授業形態が構成させていることが分かった。更に、集団の授業であっても個別指導が行われている実態が確認できた。その実態から集団授業の「機能」をみていく。

「機能」として、個々の目的が他者と一緒に課題をすることが効果的である集団を『個別目標同一課題』、個々の目標の内容区分は一緒だが、目的が類似していて、他者と一緒に課題をすることが効果的である集団を『類似目標同一課題』とした。続けて、個別課題をしているが、集団の中において活動することが個別目標となっている『個別目標個別課題』、個別の課題をしているが、個別目標が類似していて偶々活動場所集団となっている機能を『類似目標個別課題』とした。下記の図4は上記をまとめた図である。

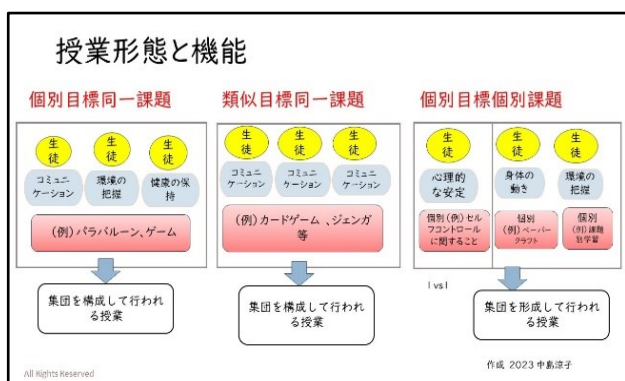


図4 機能の分類表

実習校の授業を事例に説明をすると、時間における指導は、『個別目標同一課題』『類似目標同一課題』で、集団で行う活動が効果的な指導に繋がっている。その一方で、生活単元学習、総合的な学習の時間は、同一単元、同一課題の授業内容のため、「集団を形成した授業」の形態、いわゆる一斉授業である。よって、以上のことから特別支援学校の現場で行われていた授業形態は「集団を構成した授業」の土台の上に、「集団を形成した授業」が柱として立っているという構図が出来上がるのである。

次に「集団を構成する授業」の形態の「機能」の特徴についてまとめる。

- ① 「個別目標同一課題」「類似目標同一課題」は、コミュニケーションや環境の把握、心の安定等が目標で、他者と関わるということが重要で、集団を構成することで効果的な活動ができる。
- ② 「個別目標個別課題」「類似目標個別課題」は、集団の中で活動することが目標となるため、活動場所が集団であることで効果的な活動ができる。集団という場所を適用しているだけで、指導は個別指導である。

上記のまとめから、一見集団で行われている授業も、「機能」的にみると個別指導が行われている集団の授業が存在していることがわかる。例えば「個別目標個別課題」について「機能」の特徴を概念として注目してみると、自立活動の活動場所が「集団の中」であるというだけで、基本的には個別の活動であることがわかる。対象となる生徒を具体的に示すと、集団が苦手であり、「集団に慣れること」を個別目標としている生徒が前提になるだろう。集団という活動場所を適用することで、目標を達成するための効果的な活動といえるだろう。

よって、特別支援教育の現場でみる集団授業は、実は個別指導を行っているのである。

5. おわりに

本稿ではまず自立活動の変遷について示し、知的障害教育の特徴について説明した。そこから、授業がどのように構成されているのかに焦点をあて、授業形態について着目し、実習校の参与観察から、特別支援学校の授業実践を通して授業形態を機能的に分類して整理し、特徴について考察した。個別を原則とする特別支援教育において、授業形態の「機能」に着目し整理することで、個別の概念が集団であっても変わらないことが明らかになった。特に「個別目標個別課題」の考察を通して、活動場所が集団・個別に関わらず、個別指導を意味すると考えられる。

今後、通常の学級にいる特別の支援を要する児童生徒たちが、自立活動の授業を受ける可能性が示唆されると想定し、指導計画を実施する上で学習指導要領に基づいて考察を行った。この研究が通常の学級で「個別の指導計画」を作成する際に役立つことを期待し、提示していきたい。

謝辞

本研究の実習、課題研究の遂行にあたり、本学障害児教育講座教授吉井勘人先生、同所属教授古屋義博先生、山梨県立かえで支援学校中学部教頭中込昭彦先生には、本研究の作成にあたり、適切なお助言を賜りました。ここに重ねて深謝致します。最後に、実習校の皆様には、本研究の遂行にあたり多大なお助言、ご協力頂きました。ここに感謝致します。

参考文献

- ・飯島徹,他,『知的障害特別支援学校における自立活動の指導に関する研究動向』上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要,第28巻,41-45,2022.
- ・遠藤みどり『養育障害児症候群』二言臨床,1977.
- ・大井靖,他『知的障害特別支援学校を対象にした「自立活動の時間における指導」についての研究』Journal of Inclusive Education,9

巻,p.1-22,2020.

- ・小畑伸五,武田哲郎『知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害教育課程を履修する生徒の情緒及び行動上の課題に関する研究』特殊教育学研究,55巻,2号,p.85-94,2017.
- ・佐藤長武『通常学級における自立活動の視点を取り入れた授業実践—外部専門家との協働によるセンター的機能充実事業をととして—』鳴門教育大学授業実践研究—授業改善をめざして—,第20号,2021.
- ・佐藤満雄,他『知的障害教育における自立活動の課題と解決の方策—個人ない差を把握する「実態把握票」の作成及び活用を通して—』北方圏学術センター年報,Vol.11,2019.
- ・下山直人『知的障害特別支援学校の自立活動の指導』ジアース教育新社,2018.
- ・多田智美,宮前義和『知的障害特別支援学校における集団学修と個別学習を併用させた自立活動の検討』香川大学教育実践総合研究,46:25-30,2023
- ・友田明美『不適切な生育環境に関する脳科学研究』日本ペインクリニック学会誌,第27巻1号,p.1-7,2020.
- ・仲矢明孝,内田直美『特別支援学級における自立活動の時間における指導—設計・展開の過程での課題—』岡山大学教師教育開発センター紀要,第9号,2019.
- ・西 信高『「養護・訓練」について』島根大学教育学部紀要,教育科学,7,163-184,1973.
- ・福嶋祐貴『授業づくりにおける「学習形態」概念の在り方—学習過程の組織的側面と方法面の関係に着目して—』盛岡大学紀要(38),91-104,2021.
- ・松浦俊弥『特別支援学級（自閉症および情緒障害学級）における自立活動実践論—授業例としてのコミュニケーションスキルとレーニング法開発研究—』淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部）53 121—142,2019.
- ・明官茂,他,『知的障害教育における自立活動の指導の実態と課題—特別支援学校全国調査の結果から—』明星大学研究紀要—教育学部,

第13号,2023.

・山本智子『知的障害特別支援学校における「自立活動」についての一考察～A校における実践史を通して～』皇学館大学紀要,第58巻,100-123,2020.

・吉田重孝『特別支援教育における授業論の研究課題ー通常学級における授業を中心としてー』高松大学紀要,51,117-128,2009.

・吉田重孝『特別支援教育における「学習形態の交互転換のある授業」モデルの構造』高松大学紀要,52-53,187-200,2010.

・米田宏樹『日本における知的障害教育試行の帰結点としての生活教育ー戦後初期の教育実践を中心にー』障害科学研究,33,145-157,2009.

・鷲塚祐奈,他『発達障害児の生活上の困難に対する自立活動の指導に関する文献的検討』長野大学紀要第43巻第3号,49-55 (221-227),2021.

・『支援を必要とする児童・生徒の教育のために』神奈川県立総合教育センター,2015.